‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

59号 1992.12.20
文・編集・発行
恋怪子

CD: LENINGRAD COWBOYS "WE CUM FROM BROOKLYN"

だが、そのユニークなレニングラード・カウボーイズというコンセプトは、スクリーンの中だけに存在しているのではなかった。そう、彼らはアキ・カウリスマキが創造した架空のバンドではなく、映画が製作される以前から実在していたらしいのだ。92年の6月、僕はニューヨークで実際にそのライヴを観てしまった。

それはニュー・ミュージック・セミナーの一環として行われたフィンランドからのロック・バンドのショー・ケース、「フィニッシュ・ナイト」でのことだ。映画「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」はニューヨークでもカルトな人気を集め、現在でもしばしばレイト・ショーなどで上演されていることもあって、会場のクラブ、CBGBは彼らを目当てにした観客でぎっしりの賑わい。そして、そのショー・ケースのヘッド・ライナーとしてステージに立ったレニングラード・カウボーイズは映画そのまま、いや、映画以上にユニークこのうえないライヴ・パフォーマンスで、やんやの喝采を浴びたのだった。

まずは数十センチもあるトンガリ・リーゼント・ヘアーとトンガリ・ブーツのメンバーがずらりと並んだだけで壮観。しかも、演奏は百戦錬磨のライヴ・バンドと思わせる強力さだ。ハードなロックンロールもあれば、ロマンチックなバラードも、もちろん、得意のボルカもある。さらには、トラクターのエンジン音に始まるビートルズの「バック・イン・USSR」からパンキーに疾走するロシア民謡の「カチューシャ」まで、人を食った解釈のカヴァー・ソングもがんがん披露される。そして、映画同様にコミカルな演劇的要素もたっぷり。リーダーとおぼしきヴォーカリストがエルヴィス・プレスリーに扮装して登場し、頭からテレビ受像機をかぶった状態で歌うあたりはまさに抱腹絶倒だ。シャナナやブルース・ブラザース、ブレイヴ・コンボやポーグズ、あるいはフランク・ザッパなどにも通ずる面白さと言ってしまえば、そのライヴ・パフォーマンスのユニークさが伝わるだろうか? ともあれ、フィンランドにはこんなバンドが実在していたのだという驚きは、本当に強烈なものがあった。

高橋健太郎

(発売元:BMGビクター ¥2,500)

アキ・カウリスマキ監督の映画「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」は実にすてきなロード・ムーヴィー。奇妙なマネージャーにひきつれられてツンドラ地帯からアメリカに渡り(飛行機から見たニューヨークの夜景は息をのむほど美しい)、凍ったままのメンバーもいっしょに、追っかけの(実はたよりにバンドを追いかける)農夫もいっしょに、あちこちでライブをやりながら(その土地その土地にあった音楽をやりながら)、ニューヨークからメキシコまで、アメリカをひた走る。あ、途中で従兄弟というのがいきなり出現してメンバーになるんだった。

おとぎ話のようなストーリー、美しいアメリカ、そしてレニングラード・カウボーイズのすばらしい音楽。2年前にはじめて観て以来10回以上映画館へ観にいったしウォークマンで映画を録音までしたのだ。

その大好きな大好きなレニングラード・カウボーイズが日本でアルバム・デビュー!!!

なんと今年の夏、アメリカ・ツアーをやったらしく、CDの解説で高橋健太郎氏はニューヨークのCBGBで「実際にそのライブを観てしまった」と書いている。いいなあ。

映画をはじめて観たとき、あのとうりの格好でライブをやっている実在のバンドだと知って以来、ずっとライブを見たいと熱望しているんだから。

CDには映画の中でやった曲もいくつか入っていて、あ、これあの場面でやったこの場面でやったと思い出せて楽しい。

CDを聴いて、映画で観たよりもっともっとすごいバンドだとわかってうれしい。

来年早々、日本のCFにも登場するそうだし、やはり来年には、アキ・カウリスマキ監督のロード・ムーヴィー第2弾に主演する予定とのことで、これもうれしーい。

日本に来てほしーい。

CD: BON JOVI "KEEP THE FAITH"

CDのライナーノーツに、ジョン・ボン・ジョヴィが「自分自身の再発見、つまり自分が誰なのか、どう感じるかを、何歩かさがって、その自分のいるべき場所を探しあてたような、そんな曲ばかり」と言ったということが書いてある。

自分自身であろうとすると、そこにはどうしても苦しみが伴う。まわりの人たちの求めるイメージに合わせたほうが楽に思えるときもある。そのイメージを壊して自分自身であろうとするとき、そのイメージが大きければ大きいほどその苦しみも大きい。けれども、そうやって自分自身であることを選びとった人は、まず自分にとって自分自身がかけがえのないものになる。"KEEP THE FAITH"の1曲目の"I BELIEVE"の"CLOSE YOUR EYES AND YOU WILL SEE THAT YOU ARE ALL YOU REALLY NEED"(「目を閉じれば分かるだろう 本当に必要なのは自分自身だけだと」)というのは、まさにそういう意味である。かけがえのない存在、かわりのきかない存在。その人がその人自身であればそれは類型(スタイル)ではなくなる。BON JOVIの"KEEP THE FAITH"は類型(スタイル)ではない、できたばかりのバンドのような独自(オリジナル)なものと、苦しみを経た力強さに満ちている。ジョンは目を閉じて視えたものを歌っている。

I BELIEVE
(J. Bon Jovi)

All I know is what I've been sold
You can read my life like a fortune told
I've seen the dream, there's no land of Oz
But I got my brain and I got a heart
And courage built I won't let go
What we need right now is .....soul

I can't do this, you can't do that
They feed us lines but I won't act
And all good things will come to pass
But the truth is all you have to have
And would you lie for it?
(Do you) cry for it?
(Would you) die for it?
Would you

I believe, I believe
With every breath that I breathe
You and me can turn a whisper to a scream
I believe, I believe

You gave it all, then you gave more
You know what you came here for
You'll pay the cost,
like it's your cross to bear
Are we the ones that put it there
Would you scheme for it,
scream for it, bleed for it,
Would you

I believe, I believe
Believe we're still worth
The fight you'll see
There's hope for this world tonight
I believe, I believe

Don't look up on your movie screens
In record stores or magazines
Close your eyes and you will see
That you are all you really need

I believe, I believe
With every breath that I breathe
You and me can turn a whisper to a scream
I believe, I believe

"KEEP THE FAITH"にはいい歌がいっぱいはいっています。必聴。

LETTER: TO 太田隆幸

あなたは手紙に「ヒロト君は不誠実なんかじゃない。マサミ追悼ライブに僕は行かなかったので詳しくは分らず、あくまでも推測でしかありませんがヒロト君のはいた言葉は状況であって、大切なのはヒロト君がそういう言葉をはいてまで伝えたかった正直でいたいという気持ちじゃないでしょうか」と書いていますけれど、状況をそのまま言えば、それが正直であり誠実であるということにはならないと思います。ステージの上で正直であり、誠実であるということは、ほんとうにやりたいことをやることに、いいステージをやることに全力を尽くすことだと思います。

時間にメンバーがそろわなかったことや、曲順をきめていなかったことは、あなたが書いているように、たしかに状況であり、ブルーハーツの音楽の本質(よしつ)とは本来関係のないことです。けれども、そういう状況はステージにのせるべきじゃない。状況は切り離して全力を尽くそうとするのが誠実ってものです。それがないから、状況にひっぱられ、状況が音楽の本質(よしつ)に関係してしまったのです。

いつだって、やる側はやる側の状況や事情を抱えているわけですし、きく側もきく側の状況や事情を抱えているわけです。けれども、そうしたものにひっぱられずに、ひきずられずにお互いが音楽に対してまっすぐになるのがライブってものなのではありませんか?

ブルーハーツのライブを待つことだけが、先を照らすたった一つの光だったとき、あと何日でブルーハーツのライブがあると想うことだけが苦しい状況から逃げずにいられる力だったとき、そんなときでも私には、ただブルーハーツがステージにいるというだけではダメだった。自分の抱えている状況や事情を無くして、まっすぐなじになれないライブではダメだった。だけど、まっすぐな心でみなぎらせることができたときの心からのよろこびは、どれほど私を前進させたことか。

だけど、これはあなたが手紙の最後に「ザ・ブルーハーツが5年という年月の中であたえてくれた瞬間、それだけは絶対に忘れないで下さい」と書いてくれたような、ブルーハーツにあたえてもらったものではないのです。ブルーハーツのライブで、私がまっすぐなじでみなぎらせることのできたすべての瞬間、それはブルーハーツがあたえてくれたんじゃない。ブルーハーツが自分たちに正直であり(または正直であろうとし)、私が私に正直であった(または正直であろうとした)なかで、私が獲得したものです。自分に正直だったから獲得できた。ブルーハーツにどうあってほしいとか、どうしてほしいとか、他力で願ったり、ブルーハーツはこう考えているんじゃないかとか、こうしようとしているんじゃないかと都合よく解釈したりせずに、まっすぐなじとまっすぐな眼で目の前のブルーハーツを見、感じ、それに正直でいたい。くもらせたくないんです、心も眼も。

そして、この5年以上もの年月の中で、まっすぐにみなぎったすべての瞬間は、もう忘れるとか忘れないとかの問題ではないんです。それはもう私の一部になっているのですから。

58号に載せた「GOOD BYE, TO ザ・ブルーハーツ」を読んで、すぐに手紙をくれた太田君どうもありがとう。あなたの手紙を読んで、また正直ということ、誠実ということも考えることができました。